初恋に愛を注ぎます。

餅亜実

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
初恋に愛を注ぎます。

【Ｎコード】
Ｎ４５９４Ｌ

【作者名】
餅亜実

【あらすじ】
初恋って叶わない。
参堂　媛水は初恋の人、山堵　蒼緒に裏切られた。
三年間ずっと閉ざしてきた「好きの思い」が
開いてしまった――――
媛水は蒼緒の気持ちをどう理解するのか――――？

（前書き）

短編です。
この小説は1日足らずで仕上げちゃってますので
あまり内容の保障は出来ませんが
よろしくお願いします！

「いや。俺参堂嫌い。」

この一言でうちの心は1回転した。

「触るな！ばか！！」

朝から教室で叫びおいかけ回している、

うちは参堂（さんどう）　媛水（ひみ）。

高校2年生の女子である。

ストレートの黒髪のロングに星型のヘアピン、

学園のロゴに白のセーター、チェックのスカートに

黒のハイソックス。

これが正しくうちの姿だ。

福岡生まれで自分のことを「うち」と表現する。

「うるせぇ！お前が教室で着替えてるのが悪いんだ！」

さっきから逃げ回っているのは

山堵（さんど）　蒼緒（あお）。

うちの初恋の人・・だった。

あの日までは。

――3年前。中2。

「なぁ、蒼緒ってさ媛水のこと好きだろ。」

クラスで男子がそんな話をしていた。

体育の終わった後教室に戻ると男子が教室で着替えていた。

だからうちはドアの後ろに隠れた。

「は、なんて？聞こえねえんだけど。」

「だから、おまえ媛水のこと好きだろ！」

え？！・・ちょ、そんなの聞かないでよ。

心の中でうちはそう思いながらドアの後ろで聞いていた。

「・・なんでそう思うのか？」

「え、あ、だってさ。お前いっつもあいつにくっついてんじゃん。
だから・・・」

「いや。俺参堂嫌い。」

――――――ズキッ

「あ、そうだったのか？・・ならいいけど。」

「なにがいいんだよ。俺はダチとアイツ落とせるか賭けてあんだよ。」

そのことを聞いたうちの中で何かが切れた。

バキッ・・。

ドアの止め具が破壊されドア自身は真ん中が見事にへこみ

男子は着替え中だというのに口を大きく開けてポカーンとしていた。

「おい、今誰が誰に賭けられてるってか？
ふざけんなよ・・・・。蒼緒？」

うちは微笑んでいる目の中に怒りを込めることを覚えた。

「え、おまえ聞いて・・！！！！！」

話途中とも構わずうちの拳は見事に蒼緒のミゾオチに直撃した。

「なぁにが落とせるか、よ。あんたみたいな男に・・・・」

「うわっちょっとまて！！ぅわ！！！」

「落とされてたまるかぁぁぁ！！！！！！！！！！！！！！！」

うちの回し蹴りが蒼緒の大事な所に直撃、右手でビンタも直撃、
そして最後にあご下から拳が直撃。
周りの男子は口を開けたまま、あとから戻ってきた女子も
びっくりして周りが硬直していた。
そして蒼緒は全治1ヶ月。うちの両親は不在で蒼緒の両親も
自分らの子供のしたことに激怒し蒼緒はこぴっどく叱られた。
そして現在。
うちはあの時アイツへの思いを消した。
あれだけ痛めつけて付きまとう馬鹿はいないと思った。
でも、居たんだ。そんな馬鹿やろうが。
1ヵ月後復帰し、うちにちょっかいを出してくる。
アレだけ殴って蹴ったのに付きまとう理由も分からない。
だから高校が変われば大丈夫と思ってた。
けれど奴は居た。
うちは学力の低い端南高校を選んでいる振りをして

萌南山学園への受験を選んでいた。
誰にも言っていなかった、アイツも端南に行くと言っていたから。
だからあえてレベルの高い高校を受験して、
頑張ったんだ。それでも、奴はここにいた。
過去を語るのもそろそろ終わりに・・・。
「おーい！参堂のパンッ！！　・・ッ。」
うちは見事に蒼緒の腹に蹴りを入れた。
こいつはうちのパンツの柄を好評しようとしていた。
いや、絶対に。
「参堂・・おまえさ、もう少し優し・くっ・・・」
「黙れ、カス。人のこと金儲けしようとした奴に言われたくない。」
思い切り睨み付け席に着く。
これはもううちの日課になっていた。
クラスだって１０クラスあるんだから一緒にならないと思っていた。
なのに、クラス、そして出席番号、席までもが隣。

ここまでなると誰でも仕組んだって思いたくなる。

でも現実である。

それが2年間、高校2年生になってもクラスは同じ。

で、席は隣。

現実が不公平だと思った。

「なぁ媛水は・・「黙れ、てかうちに話かけんで」

さすがにここまで言われたら言い返さないだろう。

でもこいつは構わず続ける。

「修学旅行、誰と回るんだ?」

こいつの質問に答えなければ授業妨害をされてしまう。

「・・・美亜と架子。」

「じゃあさ俺らとまわらね?」

「いや。」

蒼緒の顔が少し落ち込んだ。

こいつは本当に顔だけはイケメン。

成績だって運動神経だってこいつのが勝ってる。
だからこそ本当に嫌いになったんだ。
「・・回ろうって言ってんじゃん。」
「だからいやだって。」
うちは拒否し続ける。
こいつとはもう思い出もいらない。
過去は捨てた。あんたなんか大嫌い。
「・・・絶対一緒に回ってやる。」
「できるのなら。」
それが間違いだった。
「媛水ー、蒼緒くんも一緒にまわろって。」
昼休みに屋上でイキナリ架子から言われた一言。
「絶対いや。」
「だーっめ。もう良いっていったもん！」
勝手に承諾してしまっていた。

こんなことがあっていいか。
うちはあんな奴とは絶対に。
「んじゃうち抜ける。」
「もう無理だよ。先生に決定したっていったもん。」
んな勝手な。
修学旅行休みたいよぉ。
「お、居た。媛水。あ、架子ちゃん、ちょっと2人にしてくんない？」
え。ちょっとまってよ。行かないで。
「あ、はい！ごゆっくり。」
ガチャン。
「あ・・・・架子の馬鹿。」
屋上に取り残されたうちと蒼緒。
「うち、もう戻る。」
空の弁当箱を持って屋上から逃げたかった。
こんなところに2人なんて

最悪だ。あんな思いもうしたくない。

「媛水。待てよ。」

――――――グイッ

バサッ

「きゃぁ！・・・いったぁ・・」

屋上の床で頭を打った。

・・なんで床で頭を打つんだ。

目をそっと開けてみる。

目の前には蒼緒の顔が間近い。

整った顔に大きな瞳、長いまつ毛。

さらさらで香りが漂う髪の毛。

うちはとっさに顔を逸らそうとした。

でも出来なかったんだ。

「ん！！・・・！！！！！」

間近にあった顔が、口が視界に入らない場所にあった。

見えるわけがない。うちの視界には。
唇と唇が重なっていた。
今さっきより近い瞳に吸い込まれそうになる。
腕をつかまれ身動きさえできない。
呼吸を鼻でしているだけ楽だった。
でも次第に呼吸がきつくなってきた。
腕を掴んでいた手が一瞬緩んだ。
今だ。
ドンッ
「っ！！てぇ・・・」
「こっちだって痛かったよ！」
うちは涙が出るのを押さえ震え、怒りごもった声で
蒼緒に叫んでいた。
「・・悪い。でも俺は・・・」
「言い訳なんて聞かない！修学旅行なんて休む！！」

叫んですぐ、フェンスに押さえつけられた。

「・・修学旅行は絶対に来い。来なかったら痛い目にあわせるからな。」

――――――――びくっ

耳元で透き通るような声で強く囁かれて

びくともしないなんてすごい人だと思う。

「い・・行かない・・んだから。」

「お前しだいだな。」

蒼緒はそのまますぐに屋上を去って行った。

「な・・なんなの・・行くもんか。」

屋上に1人残されたうちはどうしようも出来なかった。

「おはよう・・。」

ぼぅっとしていればもう修学旅行当日。

蒼緒に言われた言葉、『来なかったら痛い目にあわせる』

それだけは絶対に嫌だった。

また裏切られるだけなのに・・・。
こんなにドキドキしてしまう。
でも好きじゃない。大嫌いだ。
「・・・。」
「おはよ！媛水！何？しけた顔して。」
架子が来た。
「あんたのせいでもあるよ・・。」
「大丈夫・・？媛水？」
美亜が声をかけてきた。
今回頼れるのは美亜だけだ。
「うう・・倒れるかもー。」
「んじゃ俺が運んでやろうか？」
蒼緒の声が後ろから響いてきた。
「あ、そだね。媛水が倒れたらよろしく。」
「え、あ、もう大丈夫！！」

美亜は少し戸惑いながら聞いてきた。

「・・ほ、本当に？」

「うん。うん。うん！！」

「ならいいけど・・。」

もうこれ以上蒼緒のペースには乗らないようにしにゃあかん。

「ちゃんと来たんだ。俺に会いたかった？」

耳元でこそっと囁かれた。

背中から電流が流れるくらいだった。

「そ・・・そんなのじゃない・・！」

「ちぇ・・。」

飛行機で福岡まで行き、大宰府天満宮に行った。

「わぁー！！久しぶりの福岡だー！！」

「あ、そうだったね。媛水って福岡っ子だっけ。」

架子が不思議そうに言った。

「なぁ蒼緒、架子ちゃんって彼氏居るのか聞いてくんない？」

蒼緒の後ろから小声で囁いていた。
蒼緒の後ろで隠れている男子、古見（こみ）　拓（たく）。
可愛い系のモテ男子らしい。
架子のタイプではないか。
「架子ちゃんって彼氏居る？」
架子に直球で蒼緒は聞いてきた。
「え、・・居ないけど。」
あのさ、あ、架子が拓に気づいた。
「き・・君名前は？」
「え、あと・・古見　拓です。」
架子は拓が気に入ったみたい。
「・・・おい媛水。あのさ」
「美、美亜！お土産どうするん？！」
いきなり話題を変えたうちにびっくりしていたが空気を読んだのか
なにも言わずに微笑んだ。

「！・・・・ぅ。」

そのまま修学旅行1日目の昼間が終わった。

「媛水！私達ちょっと男子の部屋に行って来るね！」

「きつかったら寝てていいから。じゃあね！」

架子と美亜が出で行き静かになった部屋に誰かが来た。

「・・・媛水、居るんだろ。」

とっさに聞こえた蒼緒の声。

なんでこの部屋に来たかは分からないけど逃げないと

なんだか嫌な予感がする。

「・・うちも美亜んとこいってくる！」

――グイッ

蒼緒の香りが鼻に香る。

蒼緒の白い肌が肩に触れる。

うちは今、蒼緒に後ろから抱きつれている。

「い、や！はなせぃ！！」

もがくけれど解けない腕。
蒼緒だって男の子、今はもう１７歳なんだ。
こんなことになったらうちだってやばい。
締め付ける腕に力がさらに加わる。
「あ、た・・きつい・・っ」
うちの声に気づいたのか腕を解いた。
「ごめん・・でも、聞いてくれって。」
泣きそうな瞳でそんな顔されたら
こっちだって動けやしない。
「ちょ・・やめ・・」
「俺はおまえが好きなんだって。」

「・・・・え。」

蒼緒の口からこぼれた一言。
それは信じてはいけないような
でも信じてあげなければいけない、
どうすればいいのか分からなくなった。
「あ・・・う・・嘘でしょ。またうちを陥れようと」
「マジだって！！本気だったんだよ！！3年前だって・・」
3年前、賭けられていた、それは本当だった。
先輩達にからかわれて思わず落とすと言った事実は明白だった。
今頃になってそんなこと信じられるもんか。
「ふ・・ふざけないで！！あの時大嫌いって言ったじゃん！」
「それは先輩達にそう言えって言われてたんだって！」
そんな。知らない。そんなこと。知ってるもんか。
「そ・・んな、知らないよ。今頃・・」
蒼緒には嘘をつく時目を背けるんだ絶対。
でも全然そむけない。その逆かもしれない。

そむけようとも思っていない。

本当なんだ。好きだったんだ。蒼緒が。

でも今更うちもなんて言えっこない。

「あ・・蒼緒なんて嫌い！大大大嫌い！！！」

「・・おまえが嫌っててても俺は好きなんだよ。」

――――――――ドキッ

あ、もう最悪だ。

心が崩される、壊される。

「お前のことしか今まで見てなかったんだよ！！！」

「やめてっ！！」

もう、いやいや。

本当にやめて。

死にそう。心が、心臓がズキズキする。

うちがあの時聞いて誤解したみたい。

そんなの・・もういや。

神様なんて・・なんて不公平なんだろ。

「も・・う・・やめて・・」

耳をふさぎながら叫んだ。

「俺は絶対諦める気なんてないから。」

蒼緒が部屋から出て行った。

コレが修学旅行で蒼緒を見た最後だった。

残りの2日間、蒼緒は居なかった。

体調が悪くなり帰宅したそうだ。

「・・・・蒼緒のアホ。」

うちは呟いた。

修学旅行が終わっても蒼緒は学校に来なかった。

ある日の放課後だった。

「・・・なので、・・・・です・。」

「蒼緒君は・・・・でして・・」

職員室から蒼緒の名前が聞こえてきた。

うちは職員室のドアの隙間からのぞいてみた。

「・・・で、蒼緒君は今、慶賀病院に。今は生死の間だそうです。」

「・・・・え・・・・？」

なんて言葉だろう。

うちは修学旅行前なんて完全に蒼緒を拒否し続けた。

なのに今になってアイツが居なくなるのは嫌なんて、

なんて女だろう。悔しいよ。

――――ごめん、蒼緒。

うちは職員室を離れ慶賀病院にいった。すぐに。

――――ウィーン・・

自動ドアが開き、慶賀病院の名簿を見て蒼緒を探した。

「あ、あった！この人です！！」

「あ、山堵さんですね。こちらの角を曲がった所の病室ですね」

看護婦さんは丁寧に、簡単に、教えてくれた。

「ありがとうございますっ！！」

うちは病室まで走った。
こけそうにもなりながら蒼緒の病室に言った。
――――バンッ
「蒼緒！」
「？！・・あ、媛水ちゃん。お久しぶり。」
蒼緒のお母さん、相変わらず綺麗だった。
でも瞳には涙がたまり、いかにも蒼緒の身体が危ないと
心から感じてしまった。
「あ・・蒼緒はどうなんですか・・？」
おそるおそる聞いた。
嫌な予感・・は当たった。
「今・・お医者さんが、もう目覚めないって・・一生。」
え。うそ。なんで。やめて。こんなになるなら。
好きなんて言わないで。本当に裏切られちゃってるじゃん。
「あ・・あ・・なんで・・？」

「媛水ちゃんは知らないのよね・・
蒼緒は2年前から癌の可能性があったの。」
・・・・・が・・・・ん？
「それ・・本当ですか。」
「え。ええ・・それが4日前から発病して・・
入院・・で手術もあったけど・・」
蒼緒。なんで蒼緒はいつも大切なこと言わないわけ？
いつもじゃない。いつもうちには大切なこと言わないの。
「あ・・お・・のばかぁ・・あ・」

期待させてさせるだけして裏切るなんて
もう許さないんだから。
絶対に守って貰うんだから。
生きて戻ってきてうちが「好き」っていうまでは。
約束なんだから。
だから生きてよ

勝手に死んだりしたら許さない
絶対に帰ってきてよ
お願いだから

蒼緒なら分かるでしょ。
大事なこと、伝えれなかった気持ちも
心がすごく傷つくってことだって。
「あ・・お。目覚めなさいよ。」
蒼緒のお母さんはうちに気を使ったのか
病室から出て行ってしまった。
「蒼緒！おきてよ！・・なに勝手に癌とかなっちゃてんの！
うちに好きとか言っといて、あきらめないとかいって
死ぬとか許さないからぁ！！！・・う・・ふぇ・・ぇぐ・・」

本当に、お願いだから生きてよ。
うちはこれからもあんたに・・蒼緒に恋してるんだから。

3年前からずっと・・こんなに好きなんだよ。
もし蒼緒が起きない・・目覚めなくてもうちは諦めないよ。
蒼緒が目覚めるまでここにずっと、一生居てやるんだから。

蒼緒。　うちも大好きだよ。　これからも。

―――――――――――――――――――――3年後

「蒼緒、行ってくるね。
今日こそ頑張ってよ。」
うちは高校を卒業した。
大学には行かない。
就職して仕事に就こうと思った。
相変わらず蒼緒は目を覚まさないが
回復率が大幅に高まった。
うちはあの日からずっと、毎日
お見舞いに来て「好き」だと言っていた。
いつか目が覚めて、うちが居なくても

未練が無いように。

「蒼緒・・起きてね。」

２０歳になり成人だってした。

でも蒼緒のことを考えると

まだ自分は子供なんだと思う。

「蒼緒・・・・好きだから。」

――――ピッピッ

心拍数が変わりだした。

――――ピッピッピッ

蒼緒の腕に赤いモノが流れ始めた。

「・・媛・・水・・」

かすかに、もう本当に消えそうな声で

「あの」声が聞こえてくる。

透き通り、輝きを持っていた声。

うちの大好きな・・・・人の。

「蒼緒？・・蒼緒・・・な・・の？」

うちは小声ながらにはっきりとそう聞いた。

「媛水・・す・・き・・だって・・言ってる・・だろ。」

蒼緒の意識が戻った。

うちは蒼緒が目覚めたと知ってそのまま気が遠くなって倒れたらしい。

「・・・・ん。朝だ」

目が覚めると朝、蒼緒が目覚めたのは夕方。

そして目の前には蒼緒が居た。

「媛水・・起きたか。」

白いTシャツにジャージズボンを履いて

うちの前に座っていた。

蒼緒の意識は先日中に完全復活、

うちが倒れて家に運ばれたと聞いて

わざわざうちまで来てくれたらしい。

「あ・・蒼緒。あの・・うちは、」

「あ、待て。言うな、絶対。」

止められて少し心が痛んだ。

言いたくてたまらい。

あなたが好きだって。

「いいから良く聞け。

俺は今も媛水が好きなんだけど。」

「・・・・・・。」

そっちから言われたって

うちはどうともいえない。

「おまえはどうな訳？俺のことまだ嫌い？」

うちは心底から思った。

嫌いな分けないじゃない。

3年間もずっと蒼緒のとなりで座って

蒼緒の目覚めを待ってたのに

それが気まぐれになっちゃう。

「・・・いじゃ・・無い。」

「え？なんて・・・」

蒼緒は良く聞こえないうちの声に耳を傾けた。

「・・嫌いじゃない。大嫌いの・・逆。」

あまのじゃくだ。これは。

言おうにも言い切れない。

恥ずかしくて、今まで拒否していた蒼緒に対して

申し訳なかった。

「好きってことでいいのか？」

うちは赤くなりながらコクリと頷いた。

「さ、三年間も待ってたんだから。

もう生きて帰ってこないと思ってたんだからぁ・・」

悲しみがこみ上げてきた。

3年前、癌を知ってうちはどうすることも出来なかった。

友達にだって励まされた。

でも全然楽になれなかった。

「蒼緒ぉ・・もう・・期待とかさせないでよぉ・・・。」

泣かないともう無理。

「・・俺だって三年間ずっとおまえに会いたいって思ってたんだよ。」

「・・・・・・意識なかった癖にぃ。」

蒼緒はうちの体を宝を抱きしめるように優しく包んでくれた。

「あ、ぅ・・えぐ・・ひっっく・・」

「もう裏切ったりしないからな。」

蒼緒が居た、この日にうちは

涙が止まらず蒼緒の腕の中で眠りについた。

それから1ヶ月後だった。

うちが蒼緒と結婚した。

「あ・・蒼緒・・やっぱりあんたむかつくわ。」

「え、ひど。今から聖なる行事なのに。」

式場の控え室で蒼緒はうちの首に跡を残した。
「ここって見えやすいじゃん。どうすんの。」
「いいって。媛水は俺のものって印。」
蒼緒の癌は完全に消えた。
手術は成功していたので意識さえ戻れば
普通の人同然であった。
「蒼緒。」
「へ。なに？」
蒼緒はネクタイを真っ直ぐに結びながら
疑問そうな顔を浮かべた。
「ずっと愛してる。一生。絶対。」
「なっっ！！」
蒼緒はうちのいきなりの発言にびっくりしている。
それはそうだ。好きとは言ったが愛してるなんて
言った覚えも無い。

「・・まあ・・俺も、あ、愛してる・・？」

「え、なんで疑問系？どうなの？！」

蒼緒は顔を林檎みたいにして

つぶやいた。

「い、いや。恥ずかしい・・し。」

「そっちのが好き好き言って恥ずかしかったでしょ！」

コンコンッ

「式場に行ってくださいー！」

従乗員が声をかけてきた。

「あ、はい！」

「今すぐに！・・媛水のこと、愛してる・・から。」

このときの蒼緒は

今までよりとても可愛くて

綺麗で　格好良くて

大好き

これからも一生好きだから

愛しています

うちの初恋

永遠に愛を注いで生きます

ＥＮＤ

（後書き）

楽しめていただけたでしょうか？
感想などがありましたらお願いします（ーwー）

（人気が出れば続くかも。）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4594l/

初恋に愛を注ぎます。

2010年10月15日23時10分発行